

中国内陸部における農民工の娘たちの「仕方がない」経験 —「留守児童」・「流動児童」としてのライフヒストリーを手掛かりに—

余 楽*

The “No Way Out” Experiences of Daughters of Migrant Workers in Inland China:

Based on the Life History Narratives of “Left-Behind Children” and “Migrant Children”

YU Le

Abstract

With the introduction of the Socialist Market Economy in the 1990s, China has witnessed mass migration of working-age people from inland rural villages to coastal urban areas. Previous research reveals that rural people migrate because there is “no way out” from the disparity between urban and rural areas rather than for self-fulfillment. With this in mind, this study focuses on the experiences of daughters of migrant workers who were born in the 1990s and grew up as “left behind” or “migrant” children who, in the absence of their parents, have also had “no way out but to adapt.” Based on interviews, the paper explores how four young women who attended local schools in X County, Hubei Province have struggled with limited choices in the context of urban-rural disparity. Their life histories reveal “no way out” experiences of growing up without sufficient parental care. Furthermore, as their parents find “no way out but to return” to rural villages upon retirement, daughters are compelled to take care of their aging parents, often by giving up their own way-out. Focusing on such “no way out” experiences, this study highlights the structural injustices embedded in the urban-rural duality.

Key words : Daughters of Migrant Workers, Life History, No Way Out, Injustice, Urban-Rural Dual System

1. はじめに

本稿は、中国内陸部に位置する湖北省X県において、1990年代に農民工（出稼ぎ労働者）の家庭で女兒として生まれ育った農村女性たちが、親の出稼ぎをどう経験したかを、ジェンダーの視点から分析するものである。

女性の経験に焦点をあてるのは、この時代に内陸部農村に生まれた世代には、第一子を姉とする二人きょうだいが少なくないという事実に目を向けたいためである。1979年から2014年までの計画生育政策は、原則的に「一人っ子」政策として推進されたが、農村では第一子が女兒であった場合、数年の間隔をあけて第二子を産むことが認められることが多かった。農村部でこのような方針がとられてきたのは、老後は息子に頼るものだという社会観念によるものである¹。農村では都市に比べて社会保障制度が整備されてこなかったこともあいまって、男児をもつことは親にとって生存戦略上、重要な意味をもってきた。また男児選好の規範において、きょうだい間の資源配分にジェンダーの偏りが生じやすいことも指摘されてきた（鄭磊, 2013）。「嫁に出した娘はこぼした水

キーワード：農民工の娘世代、ライフヒストリー、仕方がない、不正義、都市－農村の二元社会構造

*令和5年度生 ジェンダー学際専攻

も当然」(嫁出去的な娘、泼出去的な水)という言い回しに示されるように、女兒はいつか婚家の者になるととらえられ、大きな期待をかけられないとされる。本稿はこのような農村のジェンダー規範を意識しながら、親が農民工であるということを娘たちがどのように経験してきたのかを論じたい。

議論に入る前に、農民工という現象の背景をとらえておきたい。中国では、市場経済システムの導入が始まった1990年代から2000年代にかけて、東部・沿海部の都市が急激な経済発展を遂げた。建築業や製造業からサービス業までさまざまな領域で労働力の需要が高まり、それに応じて内陸部農村から都市部への大規模な人口移動が起きた。「民工潮」(出稼ぎブーム)と呼ばれるこの潮流において、内陸部農村では非常に多くの働き盛りの世代が村を離れ、都市の農民工になった。この傾向は今日もなお続いている。中国国家统计局が公表した「2022年農民工観測調査報告」によると、2022年の中国の農民工人口は前年比1.1%増の2億9,562万人だった。湖北省を含む中部地域²の農民工数は、9852万人となり、前年比で126万人増加した³。JETROの2021年のレポートによれば、移動人口の伸び率は全国的には2010年頃にピークを迎え、その後は年を経るごとに鈍化している。とりわけ省をまたいだ移動は次第に減少しており、中部地域以外では戸籍のある省のなかでの出稼ぎが主流になっている。これに対して中部地方では省をまたいだ長距離の出稼ぎが相対的に多い⁴。

中国研究の領域では、農民工たちが内陸部の農村に家族を残し、遠く離れた都市へと働きに出ていくという状況が大きな注目を集めてきた。ジェンダーの視点からこの現象をとらえる嚴海蓉は、2005年の論稿において、農民工たちの「仕方がない」、「出路がない」という語りに着目している。嚴が取り上げたのは、広東省深センの工場で働く若い女性たちの存在である。工場火災を運よく生き延びた湖北省出身の女工は、回復してすぐに深圳に戻って働くことを選んだ。どうしてそうするのかを尋ねられた彼女は「輪廻転生のようなもので、結局は人間になることを選ぶ」と答えた。また、「母親のように生きたくない」と答えた女工もいた。嚴はこうした語りを参照しながら、農村出身の女性労働者にとっては農村こそが何としてでも振り切って脱出したい「生死の場」(生死場)⁵であり、これに対して都市はどれだけ劣悪な環境であるとしても、「人間になることができる空間」(做人的空間)であると述べた(嚴海蓉 2005:74)。ここでの「人間になる」とは、人としての尊厳をもって堂々と生きられることを意味しているが、若い農村出身女性たちはそのような「生」の可能性は都市にしかないと認識していたととらえられるだろう。

嚴は若い世代が出稼ぎに踏み切る理由は、自己実現のためではなく、むしろ「仕方がない脱出」(无奈的出走)であると指摘する(嚴2005:79)。工場火災を生き延びた女性の「仕方がない脱出」は、その数年前に別稿において嚴が行った議論をあわせてとらえることで、より深く理解することができるだろう。1990年代以来、市場経済化の下で沿海部都市は加速的に経済発展によって文化的な生活を享受するようになったが、内陸部農村は文明や豊かさから取り残されるとともに、都市の出稼ぎ生活で疲弊したり傷を負ったりした農民工たちの身体を受け入れている。この構図を批判的にとらえ、嚴は、以下のように論じた。「農村はあらゆる資本の本源的蓄積を迅速かつ柔軟に進めるために、労働力をときに吸収しときに放出する貯水池となった」(嚴2001:21)。

さて、嚴が「仕方がない脱出」ととらえた農民工たちの多くは、今や高齢期にさしかかっており、一方で1990年以降に生まれた農民工の子世代はすでに成人に達している。彼らは親たちの「仕方がない脱出」において、「留守児童」(親の出稼ぎで農村に残された子ども)、「流動児童」(親の出稼ぎに帯同されて都市で暮らす子ども)として小中学生時代を過ごした。ここから「仕方がない」「出路がない」状況は、農民工当事者だけでなく、子世代においても経験されてきたととらえることができるのではないか。農民工の子世代、とりわけ女性たちは、親たちの「仕方がない脱出」をどのように考えていたのだろうか。また出稼ぎ生活を送る親の下で生まれ、成長し、その後大人になって自らの人生を模索していくなかで、彼女たち自身は自らの状況をどのようにとらえているのだろうか。

本稿は、このような問題意識から、90年代生まれ(中国では「90後」と呼ばれる)の農民工の娘たちのライフストーリーの聞き取りにもとづき、農民工たちの「仕方がない」状況が、その子世代にどのように経験されたのかをさぐっていく。

2. 先行研究における「留守児童」および「流動児童」

まず、本研究における「留守児童」と「流動児童」の定義を明らかにするとともに、先行研究を整理しながらその当事者がおかれてきた状況を明らかにしたい。

「留守児童」は一般に、父母両方または片親が都市部に出稼ぎに行き、戸籍所在地の農村に残されており、父母両方または片方と6ヶ月以上共同生活できない18歳以下の子どもを指す。葉敬忠らの研究によると、親が都市に出稼ぎに行く場合、農村部に残される留守児童のケアをするのは主に①片親（母親が多い）、②祖父母、③親戚または隣人、④きょうだいまたは留守児童自身であるという（葉2005）。これに対して、「流動児童」は、農民工の親とともにとともに大都市に移住し、言語や文化面において不慣れな状況において就学せざるを得なかった子どもを指す。

今日の中国では戸籍所在地以外で生活することは容易になっており、子どもが親の出稼ぎ先で教育を受けることについての障壁もかつてに比べて少なくなった⁶。しかし大学は戸籍所在地で受験しなければならないため、ほとんどの子どもたちは都市で暮らしていても、大学入学試験（「高考」と呼ばれる）を受ける前の時点で出身農村に戻る選択をする。よって農民工の子どもたちのあいだでは「留守」と「流動」の双方を経験する人も少なくない。譚深は、「留守」と「流動」は異なる時期に交互に変化するものであり、本質的には2つの異なるグループではなく、1つの同質のグループに属していると指摘している（譚2011）。

「留守児童」「流動児童」は就学期の子ども状況にかかわる社会問題であるため、先行研究は教育学的なアプローチの研究に集中している。その多くは、留守児童や流動児童が教育を受ける過程において直面する多様な問題をとりあげてきた。たとえば田慧生と呉霓は、都市における「流動児童」向けの民弁学校（私塾）の質の低さに着目し、その学校に通う子どもたちが各種の心理的問題を抱える傾向にあることを指摘した（田・呉2008）。新保敦子は、多くの農村部の子どもたちが学校で寄宿生活を送っており、日常生活の大部分を学校で過ごすようになったため、両親との情緒的つながりの欠乏から自己肯定感が低下してしまう可能性があることを指摘した（新保2014）。史耀波らもまた農村の中学生のうち、留守児童の中学生と学校で寄宿生活を送る中学生のあいだに中退傾向があったことをとらえた（史・趙2016）。

全国婦女聯合会が2013年に発表した報告書『全国農村留守児童、城郷流動児童状況研究報告』は、「流動児童」に占める男児の割合は就学前（3-5歳）と義務教育年齢（6-14歳）において「留守児童」に占める男児の割合を大きく上回ったが、義務教育年齢を超過した15歳以上になると「流動児童」に占める男児の割合は急激に下がり、女児の割合が上昇していたことを明らかにした（全国婦聯2013）。すなわち小中学生時代に「流動児童」であったか「留守児童」であったかという状況には、ジェンダーが作用した可能性が高い。また「留守児童」を含めて農村に暮らす人びとの生活時間調査を行ったHongqin Changらは、「留守児童」の女児には男児に比べて家事役割が期待される傾向があることを指摘している（Chang et al. 2011）。こうした先行研究からは、留守・流動の経験にはジェンダーによる違いがあることが分かる。またこうした経験が男性と女性のライフコースに異なる影響を与える可能性もあるだろう。Changらの研究からは、親の不在のなかで成長する女児が男児に比べて再生産労働を主体的に担うよう意識づけられていることが読み取れる。将来自らが家庭をもち子どもをもつということや、親世代の老後のケアをするということも、女児のほうが男児よりも強く意識する傾向があるのではないだろうか。

一方で、実際に「留守児童」「流動児童」として育った「90後」の若者たちのライフコースを長期的にとらえ、その生きられた経験を質的アプローチから考察するような研究はほとんど行われていない。譚深は留守児童の経験は一種のスティグマとして個人に深い影響を与え、留守児童の長期的な発展にも影響を及ぼすものと論じた（譚2011）。また、王亜軍らは幼少期が人の生涯における重要な時期であり、その時に農村に残されたり、親とともに都市に移住したりした経験は、幼少期だけでなく、成人期の発達にも長期的な影響を与えると論じた（王ほか、2021）。こうした指摘をふまえ、本研究は農民工の「仕方がない脱出」をその娘たちの視座から位置づけなおしていく。

3. 研究の方法

本研究は、主に2022年7月から9月にかけて行ったオンラインでの半構造化インタビュー調査と、同年10月から12月にかけて行ったオンラインでの補足インタビュー調査をもとにしている。また部分的には、2023年9月から11月にかけて湖北省X県の県城（県内の小都市）および複数の村落において実施したフィールドワークで得た知見が反映されている。

2022年の調査をオンラインで実施したのは、この時期、中国では新型コロナウイルス感染拡大による渡航や行動の制限が続き、対面調査を断念せざるを得なかったためである。聞き取りはすべてビデオ通話ツールを用いて60分から90分程度の時間をかけて行った。手法としてはいくつかの質問項目をあらかじめ設定したが、調査対象者には自らのライフヒストリーを振り返りながら自由に語ってもらえるように意識した。対象者は知人を起点にしたスノーボールサンプリング法を用いて選定した。なお、インタビューにあたっては、対象者の承諾を得て録音し、録音したデータを文字化にし、それに基づき分析した⁷。

主な調査項目としては、基本属性のほかに、留守児童・流動児童に至る経緯、その経験のつらいところ、農村家族との交流・関係維持、教育を受ける経歴、進路選択および将来の展望などの全般に関する項目を設けた。対象者の実際の経験に応じて掘り下げる項目は異なっていた。調査は女性8名、男性8名を対象に実施したが、本稿ではうち4名の女性の対象者に絞り、彼女たちが生まれた後から今日に至るライフヒストリーに沿って整理し、分析していく。対象者の詳細な情報は表1の通りである。

対象者たちはX県に1990年から1999年にかけて農民工家庭に生まれ育ち、大学進学までのあいだに「留守児童」あるいは「流動児童」として過ごした経験のある女性たちである。X県は湖北省の東部に位置し、2019年までは国家級貧困県であった。県内の住民の多くは出稼ぎ労働を行い、大都市の建設現場や工場製造業などの肉体労働、あるいはサービス業などに従事している。

表1 研究対象者の基本情報⁸

名前 (仮名)	出生年	出身地	きょうだい 構成	留守／流動の 経験年数	子ども時代の状況	成長後の ライフコース
夏小娟	1998	X県M村	二人姉妹 (妹)	留守6年 (自分のみ)	13～16歳まで3年間、M村の親戚の家で暮らした。16歳の時は県の病院でインターンをしていた姉から時々世話を受けた。17歳以降村の家で一人暮らし	専科大学 ⁹ 化学物質商業検 専攻 X県小学校の教師
黎雨靖	1998	出生は上海、 戸籍所在地は X県S鎮	二人姉弟 (姉)	流動13年 留守5年(母の み)	両親の出稼ぎによって上海で生まれ、幼少期は上海に暮らし、中学校1年生の時両親ともにS鎮に戻ってきた。高校3年間友達と県城でシェアハウスしたり、親戚の家に泊まったりしていた	双一流大学 ¹⁰ 国際経済と貿易専 攻 医薬品卸販売
姜糖	1998	X県M村	二人姉妹 (妹)	流動8年 留守5年(自分 のみ1年、父の み4年)	5～13歳流動児童。13～18歳留守児童。最初の1年は1人でM村の親戚の家に暮らした。14～18歳の頃は父親が住宅の建て替えのため家に戻ってきて、共同生活していた	専科大学 ビジネス英語専攻 失業中、「専昇本」 の試験 ¹¹ の準備
方園	1998	出生は上海、 戸籍所在地は X県W鎮	二人姉妹 (妹)	流動6年 留守12年(母の み)	両親の出稼ぎによって上海で生まれている。未就学期(6歳まで)には流動児童、小学校1年生の時に母と一緒にX県に戻ってきた。父親は長年に出稼ぎ労働、高校3年間は自宅に通っていた	二本大学 ¹² 中国文学専攻 X県のホテルの事 務

4. 4人のライフヒストリーに見る「仕方がない」経験

4-1 親たちの「仕方がない脱出」をめぐる状況

研究対象者4名の親世代は、1970年代以前に生まれた世代にあたる。X県ではこの世代で高等教育を受けた人は非常に少数である。中学校以下の教育水準しかない人が多く、十分に文化資本をもっていない。この世代では非常に多くが、「民工潮」の出稼ぎブームのなか、上海市をはじめとした沿海地域の大都市で働き始め、それによって現金収入を稼げるようになっていく。なかには30年以上出稼ぎの経験がある者も少なくない。厳海蓉のとらえる「仕方がない脱出」の当事者世代といえよう。

インタビュー結果からは、親世代が「仕方がない脱出」をしたことが、娘たちの学業や日々の暮らしに困難をもたらしたことをとらえることができた。4人のライフヒストリーをもとに、それぞれの子どもの時代の状況を概説しておきたい。

夏小娟は1998年に二人姉妹の妹としてX県内に生まれた。2010年（小学校卒業）から両親が出稼ぎに行ったことで、長いあいだ「留守児童」として過ごした。小学校を卒業してからの数年間、叔母の家に暮らしたが、その後はほぼ自分一人で暮らさざるを得なかった。とりわけ高校からは、看護師の姉が県城の病院で実習した1年間を除いて、自宅で一人暮らしを強いられた。日常生活の中に自分のことをケアしてくれる人はおらず、学校の勉強についても自助努力する以外のすべはなかった。その経験について、夏は以下のように語った。

夏小娟 「(何かの問題がある時) 親戚に助けてもらうが、(中略) 自分で何とか解決することはほとんど。まあ、大したことはなかった」
「(宿題) 誰も見てくれなかった。学校の先生はたまにチェックしてくれたとか、自分でやるしかない」

こうした経験について、夏は「大したことはない」「仕方がない」という語調で振り返っていた。例えば高校で文系、理系を決めるときの選択について、夏は「このような状況はほぼ、自分自身で決めることだと思う。親は生きていくためにそんなことを考えてくれる暇はないから」と語った。さらに、夏休みに都市で働く両親のもとを訪ねたときのことを思い起こしながら、夏は彼らの都市での暮らしぶりを「なんというか、農村みたいな感じなんだ。まるで私の小さいとき、祖父母の世代が住んでいたのと同じようなボロボロな家に住んでいた」と振り返った。

夏は、自分の両親が生計を立てるのに精いっぱいであり、子どもの教育に手をかける余裕がないことを理解していた。「仕方がない脱出」をした親世代は、都市において文化的で豊かな生活を送ることができているわけではなく、「仕方がない」状況のままに出稼ぎ生活を続けていると認識されていた。

親世代の出稼ぎ先での暮らしぶりについては、姜糖もまた同様の認識をもっていた。姜は1998年に二人姉妹の妹としてX県で生まれたが、2003年、5歳のときに母に連れられて姉と一緒に上海に行き、幼稚園から中学校2年までは「流動児童」として過ごした。しかし上海では都会らしい暮らしをしていただけではなく、「まるで私たちの実家のように、古めかしいタイプの家（土壁の家）に住んでいた。そして、平屋だった」と語った。

これに対して、「流動児童」の経歴が長い黎雨晴は上海での暮らしを文化的なものとして記憶していた。黎は2人姉弟の姉として1998年に生まれた。X県生まれではなく、両親の出稼ぎによって上海で生まれ、幼少期も上海に暮らした。子どもの頃、両親は上海の住宅街で小さなスーパーマーケットを営んでいた。しかし地方出身者が上海で大学受験に挑むことはできないため、黎が小学校6年生になったときに家族全員で故郷のX県に戻った。X県に戻ってからの両親は、町で電気屋を営むなどさまざまな仕事をしてきた。しかし電気屋が倒産したため、父親は再び上海で建築現場の出稼ぎを始めた。ここから黎は、「留守児童」の状況も経験することになった。母親は黎と弟の面倒をみるためX県の実家に残り、パートタイムで働きながら家計を支えてくれた。

X県に戻ってから家庭の経済状況は悪くなったこともあり、地元についてはあまりいい印象がない。とりわけ上海という大都市から農村への移動は彼女に大きなカルチャーショックをもたらした。黎にとっては上海こそが自分のいるべき場所であり、農村に所属している実感をもてなかった。彼女は「この町（X県S鎮）は自分にとっ

ての故郷のようなものだと感じてない」と語り、「帰郷」先の生活は非常に悲惨だったと振り返った。上海は「美しく、文明などがより発展しているところ」であり、X県は「インフラの悪いところ」ととらえられた。

黎は、X県と上海のあいだには非常に大きな文化的差異と教育格差があり、それが生徒同士の交友関係にも影響を及ぼしていたと語った。

黎雨晴 「(X県に) 帰ったばかりの時、学校でいじめられた。方言が話せなかったので、とても異端に思えたみたい。もちろん、先生が話している内容を理解できていなかった。まず、話しことばが違った。そして、正直なところ、地元の先生の教育能力はごく一般的な方ばかりだったし」

黎はこうした農村の状況に馴染むことができず、自らもいつかX県を脱出したいと考えながら育った。X県の教育の水準には問題があると考え、よりよい教育を受けようと重点高校の進学を目指した¹³。ただし夏と同様、こうした希望について黎も親に相談ができたわけではなく、「両親に言っても何も変えられない」「両親の立場から考えなければならない、余計に心配をかけたくない」と語った。

ただしこのような都市と農村の差異は、「流動児童」において一様に経験されたわけではない。姜糖は、上海での就学経験とX県での学校生活を比較し、X県に戻ってからのほうが授業についていけなくなったと語っていた。黎と同じく、姜もまた外地戸籍者である以上は上海で大学入学試験を受けることができないため、中学生になってから1人だけ家族と離れてX県に戻った。上海では中学校2年まで修了していたが、地元の学校においての話し言葉やカリキュラムの設置は上海と異なっていた。このため地元の中学校2年に編入し、再び学び始めるしかなかった。

姜糖 「やはり実家の学校の教材は上海と違うし、実家のほうがハードル高いかも。中学校2年までの内容はあまりに追いつかなかった、中学校3年になったら、段々わからない部分が多くなっていて、それでもうフォロー出来なくなった」

姜も当初は重点高校に進学したいと考えていたが、勉強が追いつかなかったため、諦めて普通高校に進学している。進学に関して、姜は両親から勉強を教わることを期待していなかったと語った。

姜糖 「彼ら自身の教育水準もそれほど高くないから。両親に何かを聞いても助けてもらえないこともあったし、わからないことは先生や学校のクラスメートに聞けばいいといつもいていた。両親自身は何も知らないから、私を教えることができないと思った」

親は学歴を重視しており、姜が勉強熱心ではないと責めることが多かったが、決して勉強のことや進学について相談できたわけではなかった。

方園もまた、学業面で親を頼ることはできないということに諦念をもっていた。方は自分の勉強を教える人がいなかった経験について、以下のように語った。

方園 「両親が生まれた時代は今と違い、高等教育を受けた人々はそれほど多くなく、むしろ少ないと思う。(勉強を教えることよりは)、ただ両親は早くやりなさいという指示を出していた。宿題を完成させるだけ、他のことはいっさいやってくれなかった」

「両親は教える能力がなかったのだろう。彼ら自身が高校とかに通った経験がないし、教えることが難しかったかも、そもそも両親は教えることの重要性に気づけなかったかな」

方は両親の出稼ぎ労働のため、上海で1998年に生まれた。未就学期には「流動児童」だったが、小学校1、2年生の時に母、姉と一緒にX県に戻った。その後も、父は長年にわたって単身で出稼ぎをしており、そのために

母がひとりで自分を育ててくれたという感覚をもっている。両親とも高校には行っておらず、その上に父は男尊女卑的な考えの持ち主であったため、相談相手にはならなかった。

X県に戻った後、方は重点高校で学び、「二本」とはいえ本科大学への進学を果たした。しかし彼女は、自分が行きたいと思える大学に行く夢を実現したわけではなく、ただ都市に行きたいと願い、都市にある学校を志向し、それなりに頑張った結果としてその大学に進学したという認識をもっていた。しかし次節にとらえるように、大学卒業後は都市に残ったわけではなく、X県の県城のホテルで事務職につき、母と姉と3人で暮らしている。

自分が農村出身であることについて、方は都市出身の人より劣っていると感じてきたわけではない。しかし「(都市あるいはテレビで)この小さな県ではまったく見られない光景を見て、崇拜と羨望の気持ちは時々あった」という。また農民工の子どもとして生まれたことについて方は、「人間と人間の間にかかなりの違いがある。その違いは生まれた時点で決まっている。その人たちは生来から、スタートラインを勝ち取っているような感覚だよ」と語った。すなわち農村出身者と都市出身者の間には、生まれつきの圧倒的な「違い」があることを認識しており、農村出身者であることは自分の運命であるにとらえていた。

すでに紹介した嚴海蓉(2004)の議論は、農村女性たちにとって農村は脱出したい「生死の場」であり、都市は「人間になることができる空間」ととらえたが、方もまた現時点で県城に暮らしていることについて「出路」が限られていると考えていた。しかし彼女をはじめとしてインタビューに答えた農民工の娘たちは大都市に出て自分の道を切り開くことについても、ためらいを感じていた。次節ではそのことの意味をとらえてみたい。

4-2 親たちの「仕方がない回帰」をめぐる状況

嚴海蓉が2001年に論じたように、農村は、農民工たちの傷つき疲弊した身体を受け入れる「貯水池」として位置づけられてきた。これは都市の労働市場に排除された農村労働力の農村への回帰とつながる。

2019年から、それまで出稼ぎ労働力の主な受け入れ地である上海市では、60歳以上の男性と50歳以上の女性の建設現場での作業が禁止された。続いて天津市、江西省、四川省、広東省などでも「退職令」が発表された。その結果、農民工である親世代自身は都市で働き続けることができなくなり、生計や老後の困難に直面した14。筆者が2023年9月から11月にかけてX県の複数の村落で行ったフィールドワークでは、意思に反して強制的に農村に戻らざるを得なくなった高齢の元農民工たちに出会うことがしばしばあった。中国では親が息子の結婚のために住宅、車、結納金を準備する慣習があるが、かれらは出稼ぎができなくなったことで息子の結婚資金を蓄えることができなくなったと語った。なかにはいわば生産人口として価値を作りだすことができなくなってしまったという認識を示す者もいた。農村に戻ると収入が得られなくなった上に、将来は介護が必要になるなど、子どもたちの負担になる可能性は高まる。さらに、一部の元農民工は長年の出稼ぎ労働によって多病になって労働能力を喪失している。一方で親たちがこうした「仕方がない回帰」にともなう不安を相談するのは、筆者が知る限り、娘であることが多いようだった。

筆者が2022年にオンラインで実施したインタビュー調査では、対象者たちが自らのライフコースの展望を両親の老後とどのように結びつけて考えているかを探った。大学を出た後、都市の労働市場に仕事を見つけることができた男性たちは、就職先、不動産の価格、結婚相手の意思を考えながら自らの将来の居住地を決めたいと語った。かれらは両親の老後サポートを優先項として考えているわけではないようだった。一方、女性たちは大学を出た後に両親の家からあまり離れていない地域に暮らすことを選んだり、両親の希望通りに県城で婚約者を見つけたりすることを志向していた。そうした志向の背景には、出稼ぎ先の都市から農村に戻ってくる親のことが意識されているようだった。前節でもとりあげた4人の対象者の語りを元に、具体的に掘り下げてみたい。

夏小娟は大学卒業後、武漢で不動産会社に就職した。親は彼女の安全を心配し、県城に戻るよう説得した。夏自身は県城に戻るかどうかを迷っていたが、やはり家族とともにいることが望ましいという理由により、結局は県城に戻ることを選んだように見受けられた。夏に「両親の老後の問題を考えたことはあるか」と尋ねると、「とくに考えたことがない」としつつも「自分と姉は近いところに住んでいるから。あまり心配することがない、何があったら、自分たちは対応できる」と答えた。夏は将来ずっと県城で暮らしていきたいと考えており、結婚相手を探すにしても、同郷の人と結婚するのが一番だととらえていた。

黎雨靖は、自分自身はX県になじめず、自分のいるべき場所は上海のような都会であると感じていたが、両親

はX県の他には居場所がないだろうと考えていた。黎は中国語の成語表現である「落ち葉は根に帰る」(落叶归根：他郷に住む者も最後は故郷に落ち着くことになる)という言葉を参照しながら、両親が老後、どうしても農村に戻ることになるだろうと語った。両親のその選択を尊重するつもりであるが、自分の運命を変えたい気持ちも強い。農村に残ることは強く抵抗している。農村に嫌悪感をもっている理由について、黎は以下のように語った。

黎雨靖 「だって、小さな町とか、小さい県城とか、とくに農村では、たくさんの杓子定期的な決まりごと(条条框框)があると思うんだ。人生の可能性を縮めてしまうだけ。農村出身の人から見た最高の人生のモデルは、20代に公務員になって、行政システムのなかに入っている人と結婚し、そのまま一緒に余生を過ごし、子どもを産んで子々孫々へとつないでいく(生儿育女、传宗接代)っていうこと。そうでしょう？わたしからしてみれば、そういうのって、恐ろしい軌道なんだよ」

黎は親が農村に回帰することになるであろうことを意識しつつも、自分はどうしても農村から脱出したいのだと語った。黎は将来の定住地は間違いなく都市であると語気を強めたが、経済的な状況を考えればその実現は容易ではない。また両親は彼女が早めに地元の人と結婚し、地元に残ることを希望していた。よって黎は、大都市に行きたいという願いをもちつつも、現状においては上海でもなく、省都の武漢でもなく、実家から2-3時間で行き来できる湖北省内の小都市で働いている。休みの時も時々実家に戻っており、望む「出路」を模索することは難しいようだった。

黎と同様に姜糖も、両親はまだ都市で働いているが、年をとった後はいつか必ず農村に戻るだろうと考えている。彼女は親世代も子世代も、高齢になったら農村に帰る以外の道はないのだととらえていた。

ただし親たち自身は、農村に戻った後の生活をどうするのかに不安を抱いているという。親は「(新しい)仕事を探すとかはもう無理だと思っている。もう何十年外の生活様式に慣れているから。実家の生活に慣れるのは大変だと思うから、後2、3年ぐらいは外に残りたい」と考えている。しかし姜自身は、両親はもう何十年外で働いているから、そろそろ農村に戻ったほうがいいと考えており、以下のように語った。

姜糖 「どうせいつか農村に戻ることになるじゃない。もう50歳を越えているし、大都市で長年漂泊して、もう疲れているだろうと思う。少し休んだほうがいいじゃない、と」

姜は農村に戻ってきた後の両親の生活上の不安を、自分が和らげたいと考えており、また身体障がい者である自身の姉のことも、ゆくゆくは自分が面倒をみる必要があると認識していた。こうした事情のため、将来の結婚対象を考える際に、最も優先に考えるのは相手の家と自分の家の距離であるという考えをもっていた。その理由について、姜は以下のように語った。

姜糖 「(湖北)省内出身の人の方がいい。だって、うちは子どもが2人だけで、姉は病気があって、小さい子どもと同じようなものだから。私は少しでも親に近い方がいいと思う。そうしていれば、両親が年をとってからの面倒を見るのが楽でしょう」

姜の語りには、農村出身者はいくら長年にわたって都市で暮らしていても、仕事が続けられなくなれば、都市で余生を過ごすことができる可能性はほとんどないという「仕方がない回帰」の現実が示されていた。この認識の元で、姜は、両親もゆくゆくは高齢期を迎えることになるし、身体介助を必要とする姉もいるとなれば、娘としては他の選択はなく、両親の近いところに生活するしかないと考えていた。

最後に、方園の事例を説明したい。前節でもとりあげたように、方は上海に生まれたが、農民工の子どもは生まれつき、都市の人と同じスタートラインに立っていないと感じていた。こういう現実を受けて、方は収入、結婚、将来の計画について見通しをもっていないようだった。卒業後の初職をやめた後に、県城に戻ることを選んだが、県城の就労の機会はかなり限られており、収入も低い¹⁵。今のホテルでの仕事による収入は生活の基本ニーズしか満たさない。自分の困窮を自力で解決することはできないと考え、「難しいから、神様にお願いしたい」「考

える勇気がない」と繰り返し強調した。計画を立ててもそれを実現することができないと考え、目の前のことに集中したほうが良いと考えているように見受けられた。現在の困窮と将来の不安を、方は以下のように語った。

方園 「(今の生活のプレッシャーは) 経済的に困っていることだと思う。まだ自立していないけど、家族にお金を頼むこともできない。そうしたくないけど」

「(理想的には) 両親を養えるぐらいのお金を稼ぎたい。老後の両親を自力で支えることは自分が望む生活状態だと思うけど、現時点ではかなり難しいかも」

方は、現在の自身の経済力では自立して生活することはできないととらえていた。一方で、両親の老後の問題も考えなければならないと考える。両親の老後のことを考えると、さらに将来の出路はどこにあるのかに悩んでいるように見受けられた。「ずっと県に残ると、やる事が少ない。人生にはますます期待できない」と語りつつ、しかし両親のことを考えると都市に移動することもできないととらえていた。

こうした悩みは農民工の娘たちに共通していた。大都市では高い収入を得ることができ、明るい将来が待っているように想像できる。しかし、彼女らは農村戸籍者であり、都市の若者たちと競争できるほど並外れて優れた学歴や技能をもっているわけでもない。さらに老後を迎えた両親たちが「仕方がない回帰」をするであろうことを考えれば、都市で暮らすことは簡単なことではないと認識されていた。調査対象者の4人のうちに、黎雨靖のみが都市に定住したいという意思を強くもっていた。その以外の3人は、夏小娟がすでに県で定住しており、残りの姜糖と方園は将来的に農村に定住する可能性が高いと考えていた。この3人が農村に戻る選択をしたこと背景には、両親の老後のことがあった。

本稿冒頭で示したように、中国農村では老後を息子に頼ることが慣習となってきたが、近年では女性が実家の親の老後をケアする傾向が広がっているといわれる。筆者が2023年9月から11月にかけてX県内で実施したフィールドワークでも、高齢の親をきょうだいで共にケアする「共同養老」は一般に見られた。あるケースでは、県に移住した息子と娘が隣接したアパートを購入し、両親を養う責任を分担していた。母親は内孫(親孫)である息子の子どもの世話を引き受けるだけでなく、外孫(外孫)である娘の子どもの面倒もみる。その代わりに、娘は夫の両親をケアするだけでなく、自分の両親も養わなければならない。娘による親のケアがこのように一般化していること背景として、李永萍は、2000年以降の出稼ぎ経済(打工経済)の影響を示唆する。ほとんどの農民家庭は農業を中心とした生活から、世代間分業に基づく半工業半農業の世帯モデルへと変化した。働きざかりの労働力は収入獲得のために村を遠く離れてしまうため、男性が親を扶養する意欲と能力は弱まり、農村から離れない女性が親を扶養する責任を担うことが多くなっている(李2021)。

このような傾向は、農村のジェンダー関係におけるポジティブな変化を示すものでもある。湖北省の農村で行われたある調査によれば、娘たちは高齢者の扶養において肝要な役割を果たしており、息子と同じ正式な地位を与えられていた(田瑞靖2013)。また娘が親の老後の世話をするようになっていることで、農村の高齢者たちのウェルビーイングは改善しているという研究もある(鐘漲宝、楊威 2017)。一方で李の研究は、娘たちの親の扶養傾向が高まっていること背景には、女性たちは男性に比べて農村を離れて生きていくことが現実的に困難であるということが示唆するものでもある。本稿に登場する女性たちもまた、都市の大学を卒業したにもかかわらず、親の意向に従って、あるいは自発的な責任意識において、老後を迎えた親のそばにとどまるのである。

「民工潮」のなかで「仕方がない脱出」をした農民工たちの多くは、子世代が高校や大学への進学を果たすことを期待していたと考えられる。たとえば、湖北省の農村を対象とした黄玉琴の研究によれば、多くの親たちは、自分の子どもが成長後に農村に残って農業に従事することに抵抗をもっていた。親にとって最も理想的な道は子どもが大学に進学することで「城里の人」(都市の人)という身分や「正式的」な(安定的かつ高収入の)仕事を獲得することだという(黄 2016)。また劉麗鳳も、中国農村の親たちは子どもの学業成績や進学に高い関心を示し、子どもが将来「農村を出て、農業ではない職業につき、農民ではない身分になる」(脱農村・脱農業・脱農民)という「脱三農」を果たし、立身出世を実現することを期待していると指摘した(劉 2022)。かつては「流動児童」であった黎、姜、方の3名も、当初から「留守児童」であった夏も、戸籍のある農村で学齢期を過ごしたの

は、現行の教育システムにおいて戸籍のある地域での高校進学が必須になっているためであった。農民工の娘たちは、学業生活について親に相談することはできなかつたと振り返っていたが、よい成果をあげるよう口うるさく言われたと記憶していた。親たちはよりよい選択肢を娘たちに残したいと願っていたのだろう。

しかし成人になった娘たちの現実のライフコースをとらえてみると、実際の選択の余地は限られていたように見える。彼女たちの語りからは、将来への「無力さ」「期待できない」感覚が強く見受けられた。その感覚は、親世代がとらえていた農村の「仕方がない」状況の残滓であると同時に、振り切って農村からの脱出を果たした彼らが疲弊した身体をかかえて戻ってくる「仕方がない回帰」を受け入れなければならないという現実にとまなう無力感でもあった。

5. おわりに

本研究では湖北省X県で学齢期を過ごした4名の農民工の娘たちの語りをもとに、両親の「仕方がない脱出」としての出稼ぎが、その子世代にどのように経験されたのかに着目した。

4名の娘たちは、親の出稼ぎともなつて留守児童あるいは流動児童として過ごしていた。親たちと物理的・精神的に大きな距離をもって生きざるを得ないという状況において、彼女たちは日常生活においても、学業面でも、十分なケアを受けられなかつた。一方で、彼女たちは大都市で出稼ぎをする親らが、決して文化的で豊かな暮らしを送っているわけではなく、農村と同じような窮乏した「仕方がない」状況において必死で生計を維持していることを認識していた。ただし親たちの「仕方がない脱出」にとまなう彼女たちの留守児童や流動児童としての経験は、大きくジェンダーを反映しているわけではないように見受けられた。Changらの計量的分析がとらえたような、不在の親に代わつて再生産労働を担いながら育つた女性たちのライフコースについては、本稿で捕捉できたわけではなく、この点については今後も追跡的に研究を進めたい。

一方、習近平体制下での産業政策の変化やパンデミックのなかで、高齢期を迎えた農民工たちは生産人口として扱われなくなっている。都市の労働市場に居場所がなくなれば、かれらは農村への「仕方がない回帰」を選ばざるを得ない。このような親たちの「仕方がない回帰」をめぐることは、男性と女性の経験は異なる文脈をもち、そこにはジェンダーが反映されていた。

将来の進路を考慮する際に、男性たちは都市の労働市場で生き残っていけるという前提において、両親の老後のケアより自らの暮らしを優先的に考慮していた。これに対して女性たちはいずれ農村に戻ることになる自分の親の存在を意識した選択を行っていた。大学卒業後に親からX県に戻つて結婚するように求められたケースもあれば、親の内心の不安や期待を察知し主体的にケアを引き受けようとしているケースもあった。親たちのあいだでも、都市での仕事の機会が多い息子と比較して、X県にとどまる娘に老後のケアを期待する傾向が高まっているように見受けられた。こうした状況のなかで農民工の娘たちは、自分たちの将来の出路は限られていると語つたのだつた。

葉敬忠は、中国においては都市と農村を分断する二元的な社会構造と制度が依然として存在していることを指摘する。農民工自身の経済的な制約もあり、体制による制約を打ち破つて、一家をあげて都市に移動すること（挙家遷移）を実現することは非常に難しい。「民工潮」以来、中国の都市は、生産年齢人口（15歳～64歳）の農村出身者を労働力として受け入れてきた。しかし都市での就業に適さない学齢期の子どもたちのケアや学業達成を含めた、農民工の社会的再生産の問題は不問に付されてきた。したがつて、親世代の出稼ぎ労働に伴い、子どもたちは留守児童か流動児童となることを避けられない（葉2019：22）。すなわち、留守児童と流動児童は、中国の経済発展の不均衡による産物なのである。

開発経済学の議論では、農村労働力の流動は、家計の収入最大化を実現するための合理的で自由な選択ととらえられる傾向がある。葉はこのことをふまえ、出稼ぎ労働が農村家庭の自由な選択であるならば、それ以外の選択肢は存在するのだろうかと問いかける。そして農村の留守家庭が抱える厳しい生活現実を、その家族の自己決定の結果と考えるべきではないという鋭い批判を展開する（葉2019：22）。

農村出身者たちは市民として都市に居場所をもつことができない。自由選択としてではなく、生き延びていくために「仕方がない」状況のなかでの選択として都市で出稼ぎ労働を行っていると理解する方が適切だと考えら

れる。さらにこうした農民工たちは高齢になって、体力上の優位性がなくなったら、都市の労働市場からは閉め出されることになる。そのとき、かれらはその身体をかかえ、労働力貯水池としての農村へと「仕方がない回帰」を目指していくしかない。

中国の農民工のこのような「仕方がない」選択のあり方を我々はどうか考えるべきだろうか。

中村剛は社会福祉における正義の問題を論じるなかで、知的障がいをもった人の入所後の生活状況をめぐって、近接した問題を取り上げている。中村は障がい者らがかかえる「仕方がない」という感覚は実は「不正義の経験」として論じた。この論考において、「仕方がない」と思われ見放されている人々は、ただほかでもあり得る可能性に思考が閉じられただけであるととらえられている。言いかえれば、この「仕方がない」経験者は経済的・政治的・法的なものによって生まれた犠牲者である（中村 2008）。大川正彦もまた、人々が抱える、抱えこまざるを得ない生き難さ、生きづらさ、苦難は、自然にもたらされたものではないという点を強調する（大川正彦 2003: 98）。一部の不利な立場に置かれる人たちの「仕方がない」という経験は、本人の不運によるものとしてとらえられるべきではない。こうした経験を知る者は、彼らの存在が見捨てられ、他の可能性が抹消されてしまうという事実に向けなければならないのである。

農民工の娘たちに視点を戻せば、彼女たちは親世代の「仕方がない脱出」によって、「留守児童」「流動児童」として生きる以外の選択肢をもてなくなった。彼女たちは親を恨んだわけではない。親世代は農村に残れば生計を立てることができず、日常生活や子どもの教育に必要な費用を負担できない状況にさらされることになったためである。一方で農村からの「脱出」は、困窮を解決する手段になったわけではなかった。親たちもまた都市で出稼ぎ労働を行う過程において、軽視されたり、不利益を被ったりしていた。出稼ぎ以外の選択ができないなかで、生産年齢以下の子どもを都市に連れて行くのか、農村に置いていくのかという問題は、「仕方がない」状況としてつきまとっていたのだった。

このように、農民工やその子世代は、その人生において選択肢をもっているように見えるが、現実はそのようではない。かれらの生のありかたは、世代を超えた「仕方がない」経験の繰り返しのなかに、否応なく配置されている。農民工とその子世代の経験を、構造的不正義の経験として理解しなおしていくことが重要ではないだろうか。言い換えれば、彼女らの経験は貧しく弱い人がより不利な立場に置かれるという問題の構造化を示すものである。農村出身者の「仕方がない」経験の世代間の循環を中止するためには、二元社会構造における不平等の問題を引き続き、問わなければならないだろう。

【註】

- 1 楊亜楠は、中国語の諺「養兒防老」（親は子どもを産み育て、老後生活の保障を子どもの扶養義務に頼る）を指し、この「兒」は往々にして男児と理解されていると指摘する（楊亜楠 2020: 45）。
- 2 内陸部地域に相当する。山西省、安徽省、江西省、河南省、湖北省、湖南省などの省が含まれる。
- 3 中国国家统计局, 2023, 「2022年農民工観測調査報告」2023年4月28日記事 (http://www.stats.gov.cn/sj/zxfb/202304/t20230427_1939124.html, 2023年8月20日取得)。
- 4 宗金建志, 2021, 「農民工の規模が初めて減少、高齢化も進展（中国）——国家统计局「農民工観測調査報告」より」、JETRO地域・分析レポート 2021年6月24日記事 (<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/2021/f3f3980ce36fb73f.html>, 2023年9月23日取得)。
- 5 「生死の場」は、1930年代前後の中国東北部の農村生活を描いた蕭紅の小説のタイトルである。1934年に『国際協報』の『文藝』週刊に連載されたこの作品のなかで、蕭は農村の人々を動物のように生きることと死ぬことに忙殺されているととらえ、特に女性たちについて、規範の抑圧によって抵抗することもできず、黙って耐えなければならない様子を描き出した。嚴海蓉は、変わりたくても変わることができない農村の女性の艱難を示すのにこの表現を援用している。
- 6 戸籍上の所在地以外に暮らす子どもたちは、居住地の公立学校に対して入学申請費である「借読費」を払えば、義務教育を受けることを認められてきた。しかし、「借読費」の高騰によってそれを負担できない問題も注目されている（陳2019）。「留守児童」や「流動児童」の存在がメディアや研究で注目されるようになり、農民工の子どもの就学困難をめぐり問題意識が高まったことで、教育部は2010年に、義務教育段階での「借読費」の徴収を撤廃した。この取締によって、農民工の子どもの就学困難は軽減したが、実際には「借読費」と同程度の高額の寄付金が求められたり、農村戸籍の子どもの入学が拒否されたりすることがあったという。
- 7 インタビュー調査の実施にあたっては、お茶の水女子大学人文社会科学研究所の倫理審査委員会による承認を受けた（受付番号：2021-196）。

余 中国内陸部における農民工の娘たちの「仕方がない」経験

- 8 インタビュー順に記載、全員仮名である。就業の状況は2022年12月の時点の状況である。
- 9 中国における高等教育機関には一般的な4年制大学の「本科大学」と、職業能力や實際生活に必要な能力を育成することを目的とし、修業年限を2年から3年とする「専科大学」がある。
- 10 中国の教育改革の重点である世界一流大学・一流学科構築のプログラムの下に設置された大学の一類型である。名門大学とらえることが多い。
- 11 「専昇本」試験とは成人向けの大学統一入試のことである。専科大学の卒業生が本科の学歴を取得するルートの一つである。中国社会では高学歴志向が強いため、近年、専科大卒者の就職難が問題になっている。このため「専昇本」試験を利用して学歴向上を図る人が増えている。
- 12 4年制の本科大学の種類の一つである。2017年まで中国の本科大学は一本・二本・三本といったランク付けが行われており、二本大学はその中間にあった。中国の大卒者のなかでは、二本大学の卒業生が最大のグループであるといわれている。
- 13 普通学校と分岐するかたちで重点学校を設置することは中国の教育制度の特徴の一つである。小学校から大学までの教育の各段階で、重点小学、重点中学、重点高校、重点大学は存在している。重点学校は大都市あるいは発展している町に集中することが多く、重点学校と指定された学校は、教育経費、教師の配置と待遇、生徒の募集などの面で国家や地方政府からの優遇を受けることができる。進学先が「重点高校」であった場合、有名な大学に進学することはより容易であると思われる。
- 14 看中国「中国 8000万人の高齢農民工は仕事を失っていく」2023年3月31日記事
(<https://www.visiontimesjp.com/?p=41014> 2023年11月14日取得)。
- 15 一般社員の月の収入は最低1000元、最高3000元しかもらえなかった。日本円に両替すれば、月は2万～5万の収入に当たる。都市で就職する際の収入は5000元(10万円)だった。

【参考文献一覧】

- Chang, H, Dong, X & MacPhail, F., 2011. "Labor Migration and Time Use Patterns of the Left - behind Children and Elderly in Rural China," World Development, Elsevier, vol. 39(12), 2199-2210.
- 陳伊, 2007, 「中国における農民工子女に対する教育問題—中国における農民工子女に対する教育問題 教育機会均等の実現に向けて」『千葉大学文学研究科院生紀要』1: 1-10.
- 黃玉琴, 2016, <向上流動渠道と農村教育性別平等: 華中蓮荷村の変遷 (1958-2012)>, 《學習与实践》1: 108-117.
- 侯祺, 2017, 「中国における「農民工」の歴史の変遷と農村の貧困調査」『名城論叢』18:89-147.
- 李永萍, 2021, <家庭政治視角下的農村“女兒養老”及其形成規制>《南京農業大學學報(社會科學版)》21: 1-10.
- 劉麗鳳, 2022, 『中学中退—中国農村中学校の生徒と教師のエスノグラフィ—』世織書房.
- 新保敦子, 2014, 「中国農村部における子どもの貧困に関する一考察: 留守児童の寄宿舎生活に焦点を当てて」『早稲田大学教育・総合科学学術院(人文科学・社会科学編)』63: 65-74.
- 中村綱, 2008, 「社会福祉における正義——「仕方がない」から「不正義の経験」へ——」『社会福祉学』2: 3-16.
- 大川正彦, 2003, 「研究動向〈不正義の経験〉論のほうへ」社会思想史学会年報「社会思想史研究〈特集〉思想史研究の新たな展開にむけて」(藤原書店) 27: 97-105.
- 史耀波・趙欣欣, 2016, <父母外出務工与寄宿制: 哪個对農村學生輟學影響更大? 基于西部三省1881名初中生的实证分析>《教育与經濟》5: 78-83.
- 譚深, 2011, 《中国農村留守兒童研究述評》, 《中国社会科学》第1期。
- 田慧生・吳寬・張寧娟・李曉強, 2008, <進城務工農民隨遷子女教育狀況調研報告>(中央教育科学研究所課題組)《教育研究》4:13-21.
- 田瑞靖, 2013, <郷土社会的“女兒養老”實踐規制及其效果——基于鄂中L村的調查>《南方人口》2: 46-53.
- 王亚军・鄭曉東・方詳明, 2021, <留守經歷对農村兒童長期發展影響的研究進展>, 《中国農業大學學報》26: 227-290.
- 楊垂楠, 2020, 中国における「一人っ子政策」の撤廃と女性就業—勤労権の保障を中心に—『ソシオサイエンス』26: 40-57.
- 嚴善平, 2006, 「中国における農業、農村、農民および農民工—四農問題の実態と政策転換のプロセス—」(日本記者クラブ研究会「中国経済」) 1-16.
- 葉敬忠・James R. Murray編, 2005, 《關注留守兒童》, 社会科学文献出版社.
- 葉敬忠, 2019, <農村留守人口研究: 基本立場、認識誤区与理論轉向>, 《人口研究》2: 21-30.
- 嚴海蓉, 2001, <素質、自我發展、和階級的幽靈>《讀書》3: 18-26.
- 嚴海蓉, 2005, <虚空的農村和空虚的主体>, 《讀書》7: 74-83.
- 鐘張宝, 楊威, 2017, <原生家庭偏好、現代性与農村女兒家庭養—基于湖北省紅安縣的实证分析>, 《學習与实践》4: 115-125.
- 鄭磊, 2013, <同胞性別結構、家庭内部資源分配与教育獲得>, 《社會学研究》5: 76-103.
- 中華全國婦女連合会課題組, 2013, 《我國農村留守兒童、城鄉流動兒童狀況研究報告流动兒童狀況研究報告》
(2023年11月22日取得 <http://www.reformdata.org/2013/0510/22228.shtml>).